

18. 周年放牧によって得られた黒毛和種去勢牛の産肉成績

農林水産研究指導センター畜産研究部・畜産技術室¹⁾

○酒井奏・日高康志・金丸英伸¹⁾・鶴岡克彦
(病鑑) 藤田達男・倉原貴美

【目的】

肥育に必要な増体を確保するため、高栄養飼料による放牧が望ましいが、寒地型牧草による放牧肥育では周年を通じた供給栄養価に季節的な偏りがみられる。よって、栄養価の高い高消化性ソルガムの新品種と冬場のイタリアンライグラスを組み合わせることにより、周年を通じ、安定した放牧用草種供給を行い、黒毛和種の去勢牛を用い、放牧肥育を実施する。肥育目標は出荷月齢 30 ヶ月、出荷体重は 600 kg 以上をめざす。

【方法】

供試牛は試験に供するまで育成用濃厚飼料、サイレージ等を給与した黒毛和種去勢牛 4 頭を用い、6 ヶ月齢から放牧を開始した。放牧地は晩生品種のイタリアンライグラスと BMR 品種のソルガムを用いた。放牧は 4 頭 1 セットで放牧し、1 牧区 5a ~ 10a を電気牧柵で仕切り 1 週間で移牧ができるよう調節し、飲水、鉍塩は自由摂取できるように設置した。放牧牛の体重は常法により月 1 回測定し、血液性状は体重測定に併せて採血し、一般性状を検査した。枝肉成績は(社)日本食肉格付協会の格付成績を用い、その他の牛肉性状は常法で行った。

【結果】

放牧による飼養管理を行った結果、28 ヶ月齢で 4 頭平均 609 kg (545 kg ~ 632 kg) となり、放牧期間全体の増体日量は平均 0.65kg/日であった。血液性状の主要な測定値は GOT で 48.3 ~ 101.5 μ L、総コレステロールは 72.5 ~ 130.5mg/dL、血中アンモニアは 27.5 ~ 117.0 μ g/dL、尿素窒素は 4.6mg ~ 18.7mg、各項目の傾向として通常の黒毛和種肉用牛の血液正常値よりも同程度もしくはやや低い値であった。

出荷体重の平均 609 kg に対し、枝肉重量は平均 342.1 kg で歩留り 56.17% であった。

ロース芯面積は平均 37.8 cm²、バラ厚が平均 4.7 cm、皮下脂肪厚が平均 1.8 cm と通常の黒毛和種去勢牛に比べ歩留りが低く、ロース芯面積が小さく、バラ厚、皮下脂肪厚が薄い牛肉であった。肉質は脂肪交雑等級が 2.3 と低く、脂肪の色が 5.3 と濃い色であった。水分は 65.8%、脂肪 13.7%、蛋白質 19.4 %、剪断力価 2.5 kg、加熱損失率 24.5 % であった。

本試験における放牧によって得られた牛肉の特徴は内蔵量が多く、脂肪の色が濃く、その量は少ないものの、柔らかい牛肉であった。